

コロナ禍における集合的ポジティブイリュージョン (Collective Positive Illusion, CPI) ・ 協調的幸福感 (Interdependent Happiness) と スピリチュアルヘルス

人間心理学科 尾 崎 真奈美

要旨：

本稿の目的は、コロナ禍における集合的ポジティブイリュージョンの成り立ちとその功罪について、無意識的な心の働きを踏まえて検討することである。文献・直接体験・観察をもとに、非合理的信念がどのように形成され、それが協調的幸福感やメンタルヘルスに貢献していくかを、社会適応・首尾一貫感覚・美德の観点から記述した。また、外的な適応を強調するメンタルヘルスに対比し、普遍的価値を重視する生き方としてのスピリチュアルヘルス概念を説明した。その結果、文化背景や個人の資質・成長段階などにより、集合的ポジティブイリュージョン（CPI）が協調的幸福感・社会適応のためのメンタルヘルスに必要不可欠である可能性も示した。

キーワード：ポジティブイリュージョン・スピリチュアルヘルス・SOC・美德・
協調的幸福感・メンタルヘルス

Collective Positive Illusion (CPI), Interdependent Happiness, and Spiritual Health in the Corona Disaster

ABSTRACT

The purpose of this paper is to examine the origins and merits of Collective Positive Illusion in the Corona Disaster from transcendental perspective. Based on literature, direct experience, and observation, I describe how irrational beliefs are formed and contribute to mental health in terms of social adaptation, sense of coherence and virtue. In contrast to mental health, which emphasizes external adaptation, the spiritual health concept was described as a way of life that emphasizes universal values. The results also indicated that collective positive illusion (CPI) may be essential for Interdependent Happiness, depending on cultural background, individual qualities, and stage of growth.

Keywords : positive illusion, spiritual health, SOC, virtue, Interdependent Happiness, mental health

1. 危機状態における集団的なポジティブな幻想

ストレス下におかれた人間には、自分の心を守るために防衛機制が働く。その結果、現実を自己都合で解釈したり、現実否認してファンタジーの安全な世界へ逃げ込んだりすることが知られている。長引くコロナ禍において人々はどのような信念で心を守ろうとしてきたのだろうか。精神的健康の一つの要因として、正しい現実認識が挙げられることが多い。と同時に、ポジティブ心理学の分野において、ポジティブイリュージョンが精神のみならず身体的ウェルビーイングに貢献することも知られている⁽¹⁾。ポジティブイリュージョンとは、Taylorらによれば、自己高揚的動機に基づく様々な認知バイアスのことであり、実際に存在する物事を自分に都合良く解釈したり想像したりする精神的イメージや概念と定義される⁽²⁾。本項においては、個人の心理現象に限定しない、社会現象としての幻想を「集合的ポジティブイリュージョン Collective Positive Illusion,」(以下CPIと略す)と定義する。その上で、2020年以降、集合無意識的に蔓延しているいくつかのCPIの成り立ちを観察・分析しながら、現代社会の精神的健康を検討する。

危機状態における集団的幻想は、為政者らによって操作的に作られたものであるという議論も有力である。本稿においては、そうだとしても、なぜこのように多くの人が自ら進んで操作されてしまったのか、そこには心理的報酬があったに違いないという仮説のもとに論を展開していく。また、CPIによって現実を歪めて認知しながら、皆とファンタジーを共有する中で安心感を得ることと、悲惨な事実を直視し、マイノリティとしてその孤独と疎外感を抱えながら生きていくことを対比させ、精神的健康について実存的視座からスピリチュアルヘルス概念を使って整理することとする。

注

本稿は、現在進行中の社会現象を取り扱っているため、評価の定まらない事項もあり、個人的経験や観察から導かれた結論は主観的なものに過ぎず信憑性に欠ける可能性もある。しかし、渦中の記録としての意義はあると判断したために発表することにしたものである。

2. ポジティブイリュージョンと正常性バイアス

2.1. ポジティブイリュージョンは適応的か

ポジティブイリュージョンに関するこれまでの研究は、自己高揚バイアスの関連で議論されることが多かった。それによれば、ポジティブイリュージョンが適応的であるかどうかは文化的な差があり、日本人は概して適応的ではないという報告が多い⁽³⁾。これは、従来の研究で扱われるポジティブイリュージョンが、自己認知に関するポジティブイリュージョン、つまり自尊心や自己愛に関係してくる認知にフォーカスされていることが一因と言えるであろう。このような、自己高揚バイアスによるポジティブイリュージョンは、自信家であるより謙虚であることに好感度が持たれる社会においては、必ずしも適応的ではないことも実証されている。

山田らの実験によれば、ポジティブイリュージョンの多い楽観的な人の脳内ではドーパミンが放出され、現実認識が制御されていることが明らかになっている⁽⁴⁾。また、現実認識の優れた個人の鬱状態に関しては、抑鬱リアリズムという概念が提唱され実証されている⁽⁵⁾。

末期患者や難病患者の中には、非現実的な希望や奇跡を信じることによって生きながらえる人がいることも知られており、ポジティブイリュージョンの適応的な例としてあげられる⁽¹⁾。しかし、患者の良くなるという思い込みや信念が、専門家が統計的データから導き出した客観的根拠からずれているということだけでイリュージョンと決めつけて良いのかという問題は残る。それは、いかなる治療法も開発途上であり、個人差も大きく、予期しない要因が働くことも多いからである。いずれにしても、信念が心身の健康に与える影響は無視できない。疾病をどのように認知するかが、精神的健康やQOLに大いに関係しているに違いない。

2.2. 合理化という防衛機制と正常性バイアス

CPIのメカニズムについて論じる前にここで、合理化という防衛機制について整理しておこう。防衛機制とは、受け入れがたい状況、または潜在的に危険な状況に晒された時に、それによる不安を軽減しようとする無意識的な心理的メカニズムである。フェスティンガーの提唱した認知的不協和理論でも説明されているとおりである。防衛機制の中には健康的なものと不健康、病的なものがあるとされているが、その中で

も合理化は、適応的な防衛機制と考えられることが多い。

ポジティブイリュージョンも、合理化という防衛規制の一つとして機能する。確かにポジティブイリュージョンは心の一時的な避難所としての機能はあるが、現実が露呈してきたら、さらなる非合理的信念を積み重ねるしかなくなってくる。そのために、このような信念・幻想が破綻した時には、大きな心理的苦痛を伴うために、時に信じがたいようなファンタジーに逃げ込むことが知られている。直面することに耐えられないほどショッキングな現実がある場合には、無意識的に幻想世界から出られなくなり、集団的にヒステリーに似た様相で暴走してしまうことが、世界大戦の狂気などで観察されている⁽⁶⁾。従って、CPIは、ある程度必要な防衛規制として機能するが、行きすぎた場合には社会病理であると言って良いであろう。

危機状態のポジティブイリュージョンとして、災害時における正常性バイアスが危険であることも知られている。東日本大震災の際、自分だけは大丈夫だという非現実的な思い込みから逃げ遅れて命を落とした例が大きく取り上げられ、「正しく恐れる」ことが強調された⁽⁷⁾。危機状態にあつては理性的な判断が麻痺してしまうこともあって、現実認識が遅れる、と同時に、防衛規制が働いて、現実を見ていながらも無意識的に非現実的な幻想に囚われてしまう。命が奪われてしまうような危険な状況にあつては、精神的安心感のために逃げ込む幻想も、肉体的物理的な危険を引き起こしてしまう。

2.3. コロナ禍におけるCPI

一方、コロナ禍におけるポジティブイリュージョンは個人的なものではなく、集合的な幻想CPIとして異なった様相を呈している。Desmetは、これを集合的催眠状態として世界に波紋を投げかけた⁽⁸⁾。我が国では、「外出を我慢していたら感染拡大が収まる⁽⁹⁾」「ワクチンを接種したらコロナにかからない⁽¹⁰⁾」「マスクをしていたら感染しない⁽¹¹⁾」「アクリル板で感染が防げる⁽¹²⁾」などに関して、多くの人々が信じて希望を見出そうとしていたが、時間の経過と共に現実が露呈してきた。

これらは、未知のウイルスに対して集団的に抱いた幻想CPIであると考えられる。もちろん、これらの主張が全て幻想であると断言するには時間とデータの積み重ねが必要だという立場があることも否めない。しかしながら、科学的根拠がない言説が、

世界的に大々的キャンペーンとして強調されてきたのも事実であり、被害者らからの訴訟が起きている⁽¹¹⁾。我が国においては、まだその幻想の中にいる人々が多く観察されるために、本項の執筆も、2022年の時点では挑戦的とみなされることが予想される。この幻想が広く信じられてきたのは、政府や大手マスコミがこれを助長するような態度であったことが大きく影響を及ぼしている。しかし、このことの是非を問うことや、これらが幻想であるか否かを議論することは本稿の目的ではないため、専門家の参考サイトを掲げるにとどめておく⁽¹⁴⁾。

3. 精神的健康再考

世界保健機関（WHO）では精神的健康（mental health）を「自身の可能性を認識し、日常のストレスに対処でき、生産的かつ有益な仕事ができ、さらに自分が所属するコミュニティに貢献できる健康な状態」と定義している⁽¹⁵⁾。精神的健康はこのように、外界との適応概念が強調されることが多い。本稿においては、宗教や代替医療との関連で扱われることが多いスピリチュアルヘルス⁽¹⁶⁾を、実存的側面からの精神的健康という概念として区別する⁽¹⁷⁾ことにより、従来の精神的健康（mental health）との違いを明確にしてみる。そうすることで、ポジティブイリュージョンが精神的健康に貢献するかどうかについて、よりの確な理解が深まると考えるからである。

3.1. 適応と精神的健康

まず、適応概念と精神的健康について検討してみる。WHOの精神的健康で「コミュニティに貢献できる」と強調されているように、社会適応は、精神的健康の重要なファクターとされている。適応障害という疾病があるほど、適応がうまくできない場合には精神を病んでしまうことが知られている。一方では、過適応による自己阻害も問題となっており、周囲とうまくやっていくことを強調しすぎることも健康的ではない。極端に個性的な個人は、発達障害とされたり精神的に問題ありとされることが多いが、多くの天才的人物は適応できず不登校になったり社会からドロップアウトしながら、大きな発明や偉業を成し遂げている例も多い。

実は、適応すべき社会も、個人と同様に常に健康とは限らない。戦時のように、暴走してしまった不健康な社会状況があるときに、不健康な社会に適応して集団的殺人に加担し、表面的なメンタルヘルスの安定を図るのか、不適応なマイノリティとして平和を希求し、ハラスメントや投獄・拷問に遭いながらも誇りを保つことのどちらを

選択するのが健康的であるのか。WHOの掲げる健康概念によれば、社会適応して流れに乗ることの方が健康ということになるであろう。我が国のような調和を重んじる風土においては特に、協調的幸福感が優先されることが多い⁽¹⁷⁾。筆者は、社会適応より、普遍的で実存的価値を重んじるスピリチュアルな健康概念を提唱してきた。筆者の提唱するスピリチュアルヘルスは、不健康な社会に同調していくことではなく、命や平和といった超越的で普遍的な価値の視座からの健康を指すものである⁽¹⁸⁾。それは、時に社会秩序に抗する態度となるために、社会的・精神的な摩擦が生じ、その苦悩から鬱状態や心身症を引き起こすこともあると推察される。しかしながら、自己実現・自己超越を人格の発達段階頂点に置くMaslowは、社会から距離を置いて独自の揺るがない信念を持つ個人を、人間の成長の可能性として記述している⁽¹⁹⁾。

3.2. 危機状況における現実認識（首尾一貫感覚SOC）と精神的健康

コロナ禍において、世界中で一般人のみならず専門家も含めてほとんど全ての人々が、現状がわからない、どう対処して良いかわからないという状況に置かれた。このようなストレス下において有効であると考えられるのが、首尾一貫感覚（SOC）と呼ばれるストレス対抗資質である。コロナ禍においてはSOCの3要素のうち、「把握可能感」「処理可能感」が得られにくい状態であったが、そのような認知的不安を回復するために効果的だったのがポジティブリユージョンではないかと考えられる。また、ポジティブリユージョンによって合理化し、「有意味感」も得られた。

すなわち、どう対処したら良いのかわからないため、不完全なデータでも、都合の良い言説に無意識的にフォーカスし、歪んだ現実認識に基づく対処を盲目的に信じていくことによって安心感を得ようとしたと考えられる。ある医師は、「このワクチンの成分を調べていくと危ないということがどんどんわかってくるので調べることをやめた」と笑った。人々は、たとえ間違っていたとしても、原因やメカニズムの説明があれば、認知欲求、理解欲求が満たされて安心する。さらに、幻想を集団的に推し進めることによる一体感は、その安心感を強化し、その信念はますます強固なものとなる。現状が明らかになりその信念の綻びが見え始めると、「ワクチンは感染を予防する」から「ワクチンは重症化を防ぐ」と政府のキャンペーンも変化していくが、確証バイアスにより、人々はその矛盾にも気がつかない。SOC理論で明らかになっているのは、実際に現状を正しく認識すること以上に、現状がわかっている、把握できるという意識の方が、たとえ幻想であったとしてもストレス対処に貢献するということである。

東日本大震災における大川小学校被害⁽²⁰⁾などを検討すれば、非現実的な思い込みで、大丈夫だという安心感を得ることによって心の安定は得られても、実際に命を落としてしまうことがあることが実証されている。この事件より「正しく恐れる」という、現実をそのまま受け止めて対処することの重要性が強調されるようになった。しかしながら、悲劇的な事実を受け止めきれない未熟な精神を持った個人に対して、いつ、どこまで事実を開示するのが最適であるのかは、文化的な素地や個人差が大きいと思われる。個人主義の発達した欧米では、容赦なく真実に直面させることが誠実であるとされるのに対し、我が国では、パニックを恐れて、事実を知らせない方が適切な態度だという態度や信念が観察される。

3.3. 美徳と精神的健康

精神的健康に貢献する要因の中で超越的次元から注目されるのが、美徳による自尊感情である。社会的に貢献している、あるいは誰に知られることがなくても、正しいことをしているという清々しい満足感は、充実した良い生き方として、幸福、すなわち精神的健康をもたらすといって良いであろう。しかしながら同時に、キースの逆説の十か条のように、美徳を追求していけば、残念ながらそうでない社会と相いれなくなり、大きな問題と苦しみを引き起こすことがあるのも事実である⁽²¹⁾。それでもなお美徳を追求する個人がいるように、美徳とは、安全や基本的生活が保障されている先進諸国では、生きがいや幸福追求への大きなモチベーションとなる。実は、美徳に従うことで心身の健康を害することもあるため、この問題も、精神的健康、いわゆるメンタルヘルスとスピリチュアルヘルスという概念を区別して説明していく必要があるだろう。

コロナ禍において「社会的弱者のために」という美徳に訴えかけるキャンペーンは大きな成功を示し、人々は自ら進んで人権を放棄し、非人道的な制限に従った⁽²²⁾。このような自発的隷属⁽²³⁾は、人間性や人権意識の高い人々に対して、「脅しや賄賂といった古典的な操作より美徳に訴えることが有効である」ことが、今回、予期しなかった心理学的実験で明らかになった。

名誉のような美しい感情に訴えれば、単独の個人がなし得るより遥かに高度な犠牲的行為を行い得る⁽²⁴⁾ことも、戦時中の群衆の観察などより繰り返し語られてきた事実でもある。ワクチンの危険性を知りながら職業柄接種を迫られる医師の中には、「人

柱となる」と考えることによって心の安定を図ろうとした者もいた。治験中でリスクが明らかにされていない薬剤の被験者として自らを差し出すことが、美德であると考えたのである。そのような信念で、良心の呵責を抑えながらワクチン摂取を勧めた陰には、経済的報酬の誘惑もあったかもしれない。自己犠牲という美しい心情に対して、天が味方して薬害を免れるのではないか、という信仰に近い思い込みもあったのかもしれない。また薬害被害に関して、自分自身も被害者の立場をとることによって、責任追及を免れられるという思いもあったかもしれない。要するに、このような認知的不協和を、美德によって合理化する心理が無意識的に働いていたと考えられる。

3.4. スピリチュアルヘルス

ここまで、適応・現実認識・美德との関連で精神的健康を検討してきた。現実的な情報開示に関しては、末期患者の告知と同様に、何が精神的健康のために最適なのかを、個人の感受性、文化的背景、タイミングなどを考慮して丁寧に見極める必要がある。コロナ禍におけるポジティブイリュージョンが精神的健康に貢献するかどうかは、価値観や見解により異論があるにしても、危機的状況においては、人命確保を最大の目標とすることが普遍的な共通認識であろう。

著者はかつて、スピリチュアルヒーリングは必ずしも肉体の癒しを意味しないという論文において、スピリチュアルヘルスと身体的健康を区別した⁽²⁵⁾。精神的健康、つまりメンタルヘルスとスピリチュアルヘルス、また、身体的健康とスピリチュアルヘルスはある程度相関があると考えられるが、そうでないケースについては機序を明らかにしていく必要があると考えられる。

この図は、メンタルヘルスとスピリチュアルヘルスを適応という観点から区別したものである。それぞれの象限において、外的適応（いわゆる社会適応）と内的適応（生き方や価値観に沿っている）のあるなしで説明している⁽²⁶⁾。外的適応が良い、すなわちメンタルヘルスに問題がなくても、スピリチュアルヘルスが弱い、つまり内的矛盾を抱える場合には自己矛盾から自己欺瞞に陥ることが推測される。そのようなメンタルヘルスの危機に貢献するのが、先に示した医師のようなポジティブイリュージョンである。そのため、不健康な社会においてはこれが促進されることが考えられる。

		メンタルヘルス	
		高	低
スピリ チュアル ヘルス	高	自己実現	実存的苦悩
	低	自己中心的適応	非社会的・鬱

図1. スピリチュアルヘルスとメンタルヘルスの違い

スピリチュアルな健康を追求していくことは、必ずしもメンタルヘルス向上にも肉体的な癒しにも貢献しない可能性がある。スピリチュアルヘルスは、肉体・精神・社会といったこの世的な健康ではなく、超越的な次元での実存的問題だからである。超自然的な癒しを求められることが多い一般的なスピリチュアルヒーリングは、現世利益的なものであり、ここでいうスピリチュアルヘルスとは相いれない。

4. コロナ禍におけるポジティブイリュージョン

これまで経験したことのないような世界的パンデミック現象において、先が見通せない不安から人々は不安と恐怖に陥り、様々な言説が広まった。恐怖を煽るようなメッセージ報道により、多くの人々がそれを鵜呑みにしてしまった。この節では、多くの人々が囚われてきた、ワクチンとマスクに関するものを取り上げてみる。また、これと正反対の立場からの異議に関するものも対比させてみることにする。

4.1. ワクチン

新型コロナウイルスのワクチンに関しては、治験中で安全性が確立されていないにも関わらず、感染予防のために接種するようにと、全世界的に推奨された。そこでは、大衆を恐怖と不安に陥れ、ワクチン接種することによる社会的メリットが次々と提示された。英国では、その組織的心理操作が非人道的であると問題となっている⁽²⁷⁾。我が国においても、様々な方法でワクチン接種を推奨するキャンペーンが繰り広げられた。都合の悪いデータが隠蔽・改ざんされている⁽²⁸⁾こともあり、大衆は自ら進んでCPIを抱いていたように観察される。ワクチン接種しないと解雇される、といったハラスメントや大掛かりな賄賂なども問題であるが、心理学的に興味深いのは、美德に訴えるキャンペーンであった。「弱者を守るため、社会のためにワクチン接種を」

という良心に訴えかける美しいメッセージが至るところで聞かれた。そのために、現実やデータを吟味することなく、多くの人々が人体実験に進んで自らを提供した結果、命を落としたり、深刻な障害を発症することが暴露されてきた⁽²⁷⁾。

当初、新型コロナは「ワクチン接種によって感染予防が期待できる」と呼びかけていたWHOも厚生労働省も、世界的データでサポートできなくなってくる⁽⁸⁾と、「重症化を防ぐことができる」と言い換えるようになった。これもまた、ポジティブイリュージョンであるといえよう。信じて縋り付いていた信念が間違いであったことを受け入れることは、確証バイアス・自己保存プロセスが働き、非常に困難である⁽³⁰⁾。「4回目を打っても感染してしまった。もっと早く手配して5回打っておけばよかった・・・」というある研究者の認識のように、被害に遭いながらも合理化して心を守ろうとしている多くの人たちが観察される。

4.2. マスク

ワクチン接種による感染予防効果がない⁽¹⁴⁾にも関わらず接種する人たちと同時に、科学的根拠がないにも関わらず、マスクを着用している大衆が、我が国ではいまだに観察されている。筆者は、2020年、2021年と「なぜマスクをするのか」というタイトルの公開講座をオープンキャンパスで行ってきた。その際、なぜかするのかという問いに対して、高校生たちの回答は「皆がしているから」、「変に思われたくないから」、「決まりだから」であり、「感染予防に効果的だから」という回答より常に圧倒的に多かった。この女子高校生たちの態度は、CPI以前に同調圧力による影響が大きいが、このように自分自身で判断しないで周りに合わせる態度こそが、CPIの蔓延を助長すると考えられる。

巷では、マスク警察と呼ばれるような非人道的な行為が話題となったが、人々は「感染予防に効果がない」と気がつきながらもマスク着用を今だにやめられないようである。どうして外せないのかを聞くと、ある学生はこのように答えた。「うちに受験生がいて、うつさないようにしたいから、できるだけのことをしている。もしコロナに罹ったとしても、マスクをしていたのだと言いたいからだ。」ここに見られるのは、感染予防に効果があるかどうかという事実ではなく、マスクをしないから罹ったのだという非難を避けたいという心理的な理由があった。と同時に、マスクをしていたら罹患しないと言う非科学的なポジティブイリュージョンが神頼みのようになって心を

守っている状態が観察された。

このような心情と信念に覆われている個人に、マスクによる心身の健康被害や感染予防効果がないことを科学的・合理的に示しても全く効果はない。無意識的な事項に対して、意識的な働きかけは無効であり、理性は抑圧され全く無力なのである⁽³¹⁾。CPIに心の拠り所を置いている個人は、それが崩されることに頑なに抵抗している。興味深いことに、集合的幻想が時と共に変化していった、一貫性がなく合理的説明がつかない場合でも、全く問題はないようである。Le Bonが群集心理に関して述べているように、「一旦心象が喚起されれば今度は最初のとは少しも論理的関係のない、他の一連の心象が喚起されてくる」のであろう⁽²⁴⁾。

4.3. 現状への異議

これらに対し、当初からコロナは茶番でワクチンは生物兵器だと主張している人々もいる。そこでは、闇の勢力が世界の金融を操作して戦争やパンデミックを引き起こしていると言われる。言論や行動の自由が情報コントロールによって規制され、基本的人権も奪われ、人類を奴隷状態に陥らせているとされている。確かに、ジャーナリストたちの懸命な追及や内部告発によって信じられないような事実が2022年の年末に暴露されてきた⁽³²⁾。その流れの中で、これまでの資本主義経済の歪みを是正し、世界的な金融リセットが起きると信じている人たちもいる。近い将来、ローンや税金が廃止され、富が公平に分配され、公平に豊かで安全な社会が訪れるという。一方、聖書の黙示録のような時代だと解釈し、世の終わり、キリストの再臨を待ち望む人たちもいる。

これらの信念が現実的であるかどうかは後の時代の検証にかかっているが、これもまた、一つのCPIと捉えることができるであろう。スピリチュアルヘルスとの関連で論じれば、現世的な問題解決を確信するグループと、現実には期待しないで来世を待ち望むタイプに分かれるが、いずれも、このポジティブな確信によって精神的平安を保っている。ワクチン幻想と同様に金融リセット幻想も、時が経つにつれて現実がそのように進まないことに対して言説も変化してくる。悲惨な現実認識を回避し、楽観的な希望を抱いて心を守っていく態度は、どのような信念を持っているかにかかわらず同様に強く揺るがない。

5. まとめ：CPIの功罪

以上、コロナ禍における集合的ポジティブイリュージョンCPIの成り立ちとその功罪を記述してきた。CPIによって現実を歪めて認知しながら、皆とファンタジーを共有する中で安心感を得ることと、悲惨な事実を直視し、マイノリティとしてその孤独と疎外感を抱えながら生きていくことのどちらが望ましいのかという問いに対しては、立場により見解が異なる。包括的な健康の観点から考察すれば、メンタルヘルス・スピリチュアルヘルスの双方をバランスよく維持しながら現状に即して対応していく態度が最善と言えるだろう。それには、空気を読み、CPIを幻想と知りつつも時には従うという矛盾を、逞しく抱えながら生きていく知恵と能力が必要かもしれない。

本項においては医療のみならず、政治経済、心理学、倫理学、哲学など様々な分野で問題を巻き起こし、今なお解決に至らない地球規模のテーマについて、その渦中にもかかわらず執筆を試みた。この問題は多くの人々を巻き込んでいる事柄であり、筆者自身もまた当事者である。筆者はかつて医学部や病院で研究に携わり、製薬会社との付き合いや様々な経験も有しており、薬害の罹患者でもあるために、見解の偏りは否めない。

薬害のメカニズムや政治経済の問題はその専門家に一任することにして、ここではポジティブ心理学者としての見解を整理してみた。Desmetがいう集団催眠状態にある人たちの催眠を解くことはかなりの困難が予想されるが、まず基本的な心理メカニズムを認識することが、現状認識の一助となればと期待している。ポジティブイリュージョンの中にいる人々の意識が低いとか騙された愚かな民であると非難しているのではない。むしろ筆者は、人類が大いなる摂理の中で、心を守るためにこのようなメカニズムが与えられていることに感謝するものである。いかにスピリチュアルヘルスが高くても、この世に生きている限り精神や肉体的健康が基盤となる。それを守るために発動するのがポジティブイリュージョンなのであろう。それを利用して人を騙したりコントロールしたりする人間の性質に関しては、社会心理学や政治学の議論に譲りたい。

謝辞：薬害被害のため体調不良で進まない執筆を励まし支えてくださった家族、友人、医療関係者の方々へ、また、世界人類の平和と救済を願って、今この瞬間にも命懸けで働いてくださっている方々に、心からの敬意と謝辞を捧げる。

参考文献

1. Taylor, S.E., et.al. (2000) Psychological resources, positive illusions, and health. *American Psychologist*, 55 (1) 99-109.
2. Taylor, S.E. & Brown, J.D. (1988) Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103, 193-210.
3. 外山美樹・桜井茂男 (2001) 日本人におけるポジティブ・イリュージョン現象, *心理学研究* 72, 329-335.
4. Yamada, M. et.al. (2013) Superiority illusion arises from resting-state brain networks modulated by dopamine, *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 110 (11) 4363-4367.
5. Alloy, L.B.; Abramson, L.Y. (1988). *Depressive realism: four theoretical perspectives*.
6. 山本七平 (1983) 空気の研究, 文芸春秋.
7. 避難を妨げる「正常性バイアス」の罠 東日本大震災 9割以上が「溺死」 仙台放送 2021.2.25 FNNプライムオンライン
<https://www.fnn.jp/articles/-/143881> (2022年12月29日閲覧)
8. Desmet, M. (2022) *The Psychology of Totalitarianism*, Chelsea Green Publishing.
9. Hunter, P.R. et al. (2021) Impact of non-pharmaceutical interventions against COVID-19 in Europe: a quasi-experimental study, *Eurosurveillance* 26, (28)
<https://www.eurosurveillance.org/content/10.2807/15607917.ES.2021.26.28.2001401> (2022年12月28日閲覧)
10. UK Health Security Agency (2021) COVID-19 vaccine surveillance report - week 45 (publishing.service.gov.uk) 2023年1月2日閲覧
11. 「3密」でなくても集団感染のおそれ | 新型コロナウイルス | NHKニュース
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210430/k10013006461000.html> (2022年12月28日閲覧)
12. 「アクリル板」実は感染対策に逆効果だという衝撃 | 東洋経済オンライン Tara Parker-Pope (2021.8.30) *The New York Times* (2022年12月28日閲覧)
<https://toyokeizai.net/articles/-/451074> (2023年1月2日閲覧)
13. コロナワクチン接種後死亡、遺族が集団提訴も 国は因果関係認めず ワクチン接種の影 (上) 日経ビジネス (2022.10.22)
<https://business.nikkei.com/atcl/gen/19/00454/102600009/> (2022年12月30日閲覧)
14. 岡田正彦 (2022) 新型コロナのエビデンス https://okada-masahiko.sakura.ne.jp/?fbclid=IwAR2AJWNth3m0302_WNDh8skTjkVl07Qn87mzpqJffjh3vp-6Cy7QqaTE_8 (2022年12月28日閲覧)
15. WHO健康定義 <https://www.who.int/about/governance/constitution> (2022年12月29日閲覧)
16. 日本国際保健医療学会 (2018) 国際保健用語集より スピリチュアルヘルス
<https://seesaawiki.jp/w/jaih/d/%A5%B9%A5%D4%A5%EA%A5%C1%A5%E5%A5%A2%A5%EB%A1%A6%A5%D8%A5%EB%A5%B9> (2022年12月29日閲覧)

17. Hitokoto,H.&Joane Adeclas (2022) Harmony and Aversion in the Face of Pandemic,Japanese Pshychological Reserch, 222-248.
18. 尾崎真奈美 (2005) トランスパーソナル心理学におけるスピリチュアルヘルス概念再検討, 心身医学 45 (12), 943
19. Maslow,AH. (1968) Toward a Psychology of Being, Van Nostrand Reinhold, New York. (上田吉一訳 (1998) 完全なる人間—魂のめざすもの, 誠信書房).
20. 記憶の部屋 (2011 MEMORY EVER-DAISHINSAI)
http://memory.ever.jp/tsunami/higeki_okawa.html (2022年12月31日閲覧)
21. Keith、K M (1968) The Paradoxical Commandments、(大内 博訳, (2016) それでもなお、人を愛しなさい 人生の意味を見つけるための逆説の10ヵ条, 早川書房).
22. Ozaki. M. (2022) The pitfalls of the virtues of trust, obedience, and patience : A psychological analysis of Finland's happiness under pandemics 相模女子大学紀要 85, 1-8,
23. La Boetie, E (1553) Discours de la servitude voloonaire, (山上 浩嗣訳 (2013) 筑摩書房).
24. Le Bon, G. (1895) *La psychologie des foules*. Independently published (2021) 桜井成夫訳 (1993), 群集心理, 講談社.
25. Ozaki,M. (2007) Personality maturity doesn't promise mental health necessarily : The dimensional difference between spiritual health and mental health (Report of Chairman of the Board of Directors, ISLIS,The 23rd Symposium on Life Information Science) 国際生命情報科学会誌 25 (1), 115-122.
26. Ozaki,M. (2014) The Joy of Giving, Nakanishiya.p74 Figure7.2より日本語翻訳.
27. Walker,C. (2021) The Government's campaign to terrify people into compliance with Covid rules was shameless and cruel : Did anyone involved in the Government's campaign of Covid terror ask whether it was ethical to drive millions to despair?
<https://www.telegraph.co.uk/news/2021/02/24/governments-campaign-terrify-people-compliance-covid-rules-shameless/> (2021.10.24閲覧)
28. 厚労相、ワクチン集計変更で謝罪 「十分説明できず」共同通信 (2022.6.14).
<https://nordot.app/909286150061162496> (2022年12月31日閲覧)
29. 福島 雅典 (2022) ワクチン接種と接種後死亡の因果関係 ならびに健康被害について,「新型コロナウイルスワクチン接種と死亡事例の因果関係を考える」勉強会資料 2022年11月25日 (金) 14:00 於: 衆議院第一議員会館
https://www.lhsi.jp/docs/20221125_COVID19VaccinationStudySession.pdf (2022年12月31日閲覧)
30. Castonguay,L.G. (2000) A common factors approach to psychotherapy training. Journal of Psychotherapy Integration, 10 (3), 263-282.
31. Jung,CG. (1957) Gegenwart und Zukunft, 松代 洋一訳 (1996) 現在と未来 平凡社.
32. Twitter Files expose government influence on suppressing COVID messages that contradicted WH: Reporting cited numerous actions taken against accounts that posted views and data that contradicted CDC. Foxbusiness (2022.12.26)
<https://www.foxbusiness.com/politics/twitter-files-expose-government-influence-suppressing-covid-messages-contradicted-wh> (2023年1月2日閲覧)

